

「電子キーボードアンサンブルにおける現状と今後の方向性」

パネリスト：初山 正博(世田谷区立守山小学校)、西林 博子(平成音楽大学)、ハン・ヨンヒ (ソウル教育大学)
マーク・マンノ(台湾・東海大学)

話題提供：中地 雅之 (東京学芸大学)

司会：田中 功一、小倉 隆一郎 書記：脇山 純 (文責)

司会の小倉隆一郎先生より開会の挨拶、パネリスト、話題提供者の紹介。過去の ML 部会で扱ったテーマと流れを紹介。

扱う範囲が広いので懸案の「ML 部会」という名称についても考慮が必要との話もされた。

・学会の研究コンサートの指導、指揮も担当された中地雅之先生からの話題提供は具体的な授業のビデオでわかりやすく紹介された。器楽合奏に色々な音色を出せる電子キーボードを利用。スコア・リーディングから、編曲、ハイブリッド・オーケストラでの演奏の流れを「選曲 → 楽譜の準備 → 楽器分担 → 最後に発表」のように説明。

初等音楽教育科(保健体育科、美術科の学生)の「炎のランナー」、中等音楽音楽科の「Always 三丁目の夕日」、20名の小編成ハイブリッド・オーケストラで合唱伴奏「花は咲く」、ゼミの学生4人による「小フーガ ト短調」がビデオで紹介された。指導の中で電子楽器では表情を付けるのが難しいと言う点も指摘。「小フーガ」は演奏する前にテーマ、間奏を分析させた(フーガの理解)うえで音量バランスなども細かく調整したが、音量バランスは今後の課題とのことであった。このような授業の発展が今回の全国大会最後の研究発表の演奏につながったとのことで、プログラムの内容を説明され、実際コンサートを聴いてみて納得できた。

・初山正博先生は吹奏楽の長い指導経験で幅広い音色の研究、授業、指導法、器楽用の楽譜作成を实践されてこられた。小学校の合奏の事例をビデオで発表された。また JSEKM の立ち上げの時、電子オルガン部会、ML 部会とは別に「学校教育部会」を作る案もあったとの裏話も披露。

「電子キーボード(音を合成できない)」と「シンセサイザー

(音を合成できる)」の違いを定義され、いろいろな音が入って使いやすいものを「電子キーボード」として話を進められた。

使用法、形態から「低音オルガン」「学校用オルガン(指導用オルガン)」「電子オルガン」「シヨルダーキーボード」「マーチングキーボード」「アンサンブルキーボード」と分け具体的に紹介。

現在の音楽の授業時間や小学校にある楽器などを考えると、安定した響きを作るためには電子キーボードが不可欠との発言。器楽合奏における電子キーボードの役割を教育楽器の音域のグラフを見せながらわかりやすく説明。音色を豊かにするのにも電子キーボードは役に立つとも言われた。生の楽器、小学校で使われる楽器で不足するアルトからテナーの音域のサポートに電子キーボードを使用する利点、必要性を説明。具体例をビデオで紹介「ジッパ・ディー・ドゥー・ダー」でキーボード5台を使用。音色、音域を説明して、それぞれの役割を解説。次に、グループアンサンブルの取り組みの例として6年生が「ラバースコンチェルト」をグループごとに異なる曲想(表現の創意工夫)で演奏した例を発表。

最後に楽器メーカーへ「学校用シンセサイザー」の要望を熱く語られた。サンプリング音源では音を変えることが出来ないで、プリセットの音色の変化をレバーなどで簡単に無段階に作り出せる学校用の物理音源のシンセサイザーの開発が望まれると話を締めくくられた。

・西林博子先生はこども学科2年生対象の機能和声の基礎を教えている「ハーモニー」と言う授業の様子をビデオで紹介。

授業の中で必ずアンサンブルさせているとのこと。「かえるの合唱」で同じカデンツで演奏すれば、縦にハーモニーが同じなので、カノンの中でも合うことを確認。パート分け

してそれぞれが音を出して共有してカノンを楽しむ事を紹介。

また、コードネームを使って様々な曲をアンサンブルさせている。一曲に何回もの授業を使うのではなく、1回の授業で完結させている。「千と千尋の神隠し」のメロディにコード付けをさせパート分けをして演奏させる。ヘッドフォンで練習した後、アンサンブルをする。音色に関して、最初に選んだ音色を変更した後、もう一度アンサンブル。更にコードネームを見ながら対旋律、オブリガートを考え追加してアンサンブルする。

既成の楽譜で演奏させるのではなく、メロディ、ハーモニー、リズムの組み立てと分解を学生が自由にできることを体験させている。現場に出ても豊かな音楽を指導できるように願って授業をしているとのこと。1回の授業で理論と演奏をまとめ上げる明快な内容だった。

・ハン・ヨンヒ先生は今日のパネルディスカッションの内容は、同感だし、大変役に立ったと感想を述べられた。

良い音色の電子キーボードは必要と言う発言にも同感と述べられた。

大学では前期、後期の授業のそれぞれの最後にコンサートをしている。使用楽器はデジタルピアノだけでなく、生の楽器も入れている。

ハン先生の教えている学生はプロの音楽家を目指してはいなく、先生になるための勉強をしている。授業の目標として「楽しく音楽を感じること」「音楽性を上げること」の2点を挙げられた。共同しながら楽しく音楽をすることが大事との見解を述べられた。

音楽の喜びを感じてほしいが、ピアノ演奏は孤独な楽器。デジタルピアノで生の楽器の感じが出ればいと要望。授業では前期はデジタルピアノ、後期は生のピアノを使うなど使い分けて工夫している。3台のデジタルピアノをスピーカーを使用せずに演奏している例を発表。時々は大学の生のオーケストラと一緒にハイブリッド・オーケストラをやっているとのことであった。

韓国ではこどもの88%以上がピアノを勉強しているが、オーケストラの中でのデジタルピアノを経験することはこどもにとっていいことだと思う。中学、高等学校でピアノを止

める人が多いと言う現状も述べられた。

こどもの時からピアノの音だけでなくオーケストラの音を体験することは大切と強調された。

電子キーボードに対しての要望で、譜面台が大きいので指導するとき演奏者の顔が見にくいとも言われた。

韓国では電子キーボードは国産ではなく、日本製がほとんどと言う現状で、今後の韓国産の電子キーボードの生産、普及を熱望されていた。

・マーク・マンノ先生はアメリカの教材(当然英語で書いてある)を使って台湾で教鞭をとっている。(後の研究発表でもアメリカの教材を使用することで英語が使えるようになるメリットも発表されていた)

音楽家を訓練する教育プログラムで、出来る限り音楽的に教育することを心がけている。

良い音が鳴っているかを「聴く」ことが重要。音楽自体が説得力を持っているかどうかを学生に伝えたい。

伴奏(弱め)とメロディ(大きく)のバランスを考えるようにと演奏しながら力説。

スコア・リーディングは重要で、弦楽四重奏を電子キーボードの弦の音色を使って演奏させている。

この際、弦を弾いたことのない学生にも、弦のポウイングを意識させている。

アップビートはアップボウで、ピチカートは演奏はよく聞いて、それらしく聞こえるように演奏させていると話された。

今回は5人の話が聞ける貴重な時間が過ごせたが、2名は通訳を通すので時間がかかり持ち時間が短く感じられ、もっと聞きたいという思いが強く残った。

研究発表とパネルディスカッションは形態が違うはずで、この2年間はシナリオを司会が考え、パネリスト同士の活発な意見の交換とフロアからの質疑応答を充実させたいと考えてきたが、今回はパネリストが二転三転してなかなか決まらなかった。ただし海外からのパネリストの参加が画期的だった。これからもパネルディスカッションに音楽の環境が異なる海外からのパネリストとの交流も期待したい。